第3種郵便物認可　朝日新聞　2014年(平成26年)5月30日

(金)

13版14

教育

edu@asahi.com

水曜～土曜掲載

「第2言語」は手話

大学で進む開講

手話を語学の一つとして教える大学が少しずつ増えている。背景には「手話は言語」という認識の広まりがある。

「『あ』から『お』、覚えてきましたか？」

立教大の「日本手話1」の授業。ろう者の野崎静枝さん(37)が手話で語りかけ、通訳者の細野昌子さん(59)が話し言葉で補った。この日の授業では、学生たちは、自己紹介などを復習した後、色や家族についての表現方法を学んだ。

授業では、ろう者の日常生活も伝える。この日は野崎さんが「ハイヒールの音が自分では聞こえないから、さっき注意されました。まわりの人も、ろう者の音の学習を助けて欲しい」と話した。

「日本手話」は言語自由科目の一つとして2010年に開講した。どの学部の学生でも受講できる。レベルは4段階に分かれ、「4」ではディスカッションなどもする。授業の様子は録画され、後で視聴することもできる。オンラインシステムで復習用動画も毎回配信している。

文学部の高久歩さん(3年)は、ろう者の友人ができ、「口の動きを読み取ってもらうだけでなく、別の形でコミュニケーションしたい」と受講を決めた。

中島優奈さん(2年)は「言語として手話を学ぶ」というコンセプトに引かれた。国際交流サークルにも所属している。「東京五輪の時にはボランティアとして手話で案内できるようになりたい」と意気込む。受講者には、小学校の教員を目指す学生もいる。

手話を使って会話をする学生たち。右は非常勤講師の野崎静枝さん＝東京都豊島区の立教大

学生　コミュニケーション広げたい

開講の背景には「音声言語に限定されてきたコミュニケーション能力の開発を拡大させたい」という意見があったという。サークルなどで学ばれている「日本語対応手話」ではなく、ろう者同士が会話に使う「日本手話」にした。

細野さんは「日本語のリズムや語順から脱して身につけないといけないので、他言語を習得するのと同じ情熱が必要」と話す。

野崎さんは「ろう者は自分の声を聞き取れない。自然に自分の気持ちを表現するためには手話が必要」という。「特にろう学校の先生になる人は手話を学んでほしい」と願う。

大学　多様性への姿勢育てる

アメリカ手話を学ぶ学生たち＝愛知県日進市の名古屋外国語大

名古屋外国語大（愛知県日進市）は2008年に英語教育学科を新設する際、「アメリカ手話」の授業を開設した。ABCを学ぶ初級から、中級、上級クラスまである。

5月9日にあった上級クラス。講師の今村彩子さん(35)は両手の中指を胸にあてて、次に外に開くように広げて学生を見回した。

「What's up（最近、どう）？」という問いかけだ。学生たちは笑顔で手を動かし、会話を弾ませた。

今村さんは生まれつき耳が聞こえないが、声を出して話すことができる。授業中は時々声を出して意味を伝えながら、90分の授業を進めた。

今村さんがアメリカ手話に出会ったのは、米国の大学に留学した19歳の時だ。「こういう手話で話しているんだ」と新鮮に感じたという。英語とも文法が異なり、たとえば英語では文頭に置かれる「what」や「how」は文末にくる。

「世界には様々な言語が存在して、手話という言語もあり、国によって違う。手話を使う人の文化も知ることで視野も広がるのでは」と話す。

受講する大曲佳紀さん(4年)は「学んでみて、英語とは別の言語だと思った」。日本手話にも興味を持つようになり、インターネットで学んでいる。教員志望。「いつか子どもたちにも見せられたら」と話す。

関西学院大（兵庫県西宮市）は08年に人間福祉学部で言語科目として手話を導入。1、2年次の選択必須の「第2言語」の一つに位置づけられ、1学年で約90人が受講している。同学部の松岡克尚教授（障害者福祉論・障害学）は「手話の学びを通し、多様性を受け入れる姿勢が醸成されれば、広く教養を提供するという大学の重要な役割の一つを果たし得る」と話す。

四国学院大（香川県善通寺市）でも選択必修の第2言語科目として日本手話、夏期集中講義としてアメリカ手話の授業を設ける。また、金城学院大（名古屋市）では01年に4年制大学で初めて手話通訳士の養成科目を設けた。

通訳者の養成に期待

ろう者の「母語」である手話は長い間、ろう学校の教育現場から遠ざけられてきた。補聴器を装用し相手の口の動きを見て理解する「聴覚口話法」が長く奨励されてきたが、1990年代以降は手話を活用する学校が増えていった。

国連は2006年、障害者権利条約に「言語に手話を含む」という文言を入れた。国内では11年に障害者基本法が改正され、条文に「言語（手話を含む）」と規定された。

鳥取県は13年に全国で初めて「手話言語条例」を制定。手話学習のテキストを教育現場に配布し総合的な学習の時間に手話を教えたり、ろう学校の職員会議でNHK番組を見たりするなど手話重視を打ち出した。

派遣したりしている。北海道石狩市や三重県松阪市でも同様の条例を制定した。

大学で手話の講義の開講が徐々に増えている背景として、愛知教育大の岩田吉生准教授（特別支援教育）は、このような社会の変化の他、医療や福祉系の大学や学部が増えたことも影響していると指摘している。

日本手話学会の末森明夫会長は、大学での手話通訳者の養成に期待する。欧米では高等教育機関での養成が一般的だが、日本はボランティア活動に頼っている状況で、養成が進んでいないという。「大学での日本手話の講義は、そのような道程に向けた一里塚でもある」と話す。

（上野創）

edu@asahi.comまたはFAX03・3542・4855へ。